



古道を訪ねて②

西国街道・小野原地区

私たちが「西国街道」と愛称で呼んでいる道は、奈良時代に京の「羅生門」と博多の「太宰府」を結ぶ「山陽道」として設けられました。時代が進み江戸時代になると、山崎（大阪府と京都府の境）と西宮（兵庫県）の間は、「山崎通」と呼ばれ、参勤交代の往来の西国大名や旅人で賑わいました。

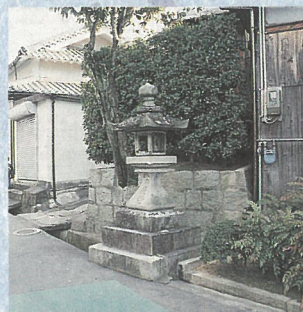
それでは、市内を東西に約7kmにわたり横断している「西国街道」の東の端、小野原地区から西へ向かってご案内します。

地図をご覧ください。①には享和2（1802）年建立の道標と寛政8（1796）年の石灯笼があります。この場所が街道と野道が分岐するため、道標には「左京ふしみ道」と刻まれ、



▲東の石灯笼と道標

左の道が京へ向かう街道であることを示しています。石灯笼は小野原地区の街道沿いに2基あります。ここにあるものと同時に建てられたものが、村の西の端②にもあります。疫病（伝染



▲西の石灯笼

病）が流行したため、村の両端に灯笼を建てて、疫病が村に入つてこないように祈りを込めたと伝えられています。東西2基の灯笼は、形や大きさに違いはありませんが、東の方には「大神宮」、西の方には「金比羅大権現」の銘があります。道標の東には、「楠水龍王」の額が飾られたお堂があります。建武三

（1336）年湊川の戦いに向かう楠正成が、ここで軍馬を休ませ、水を賞味したと伝えられる井戸があり、明治時代には茶店が設置され、旅人が名水を楽しんだそうです。お堂の向かいにある森は、素盞鳴尊を祀つた「須賀神社」です。境内には、天保6（1835）年の銘がある神輿台があり、今も地区の春日神社の祭礼（10月17日に近い日曜日）には、巡行してきた神

輿が安置されています。小野原地区では、東と西の灯笼の間は、街道が石畳風に整備され、まちなみも古道の面影を残しています。

